

手紙文の分析

―物語にみる手紙文の効用―

福 馬 育 子

目次

はじめに

第一章 手紙文の特徴

第一節 手紙文と私達

第二節 手紙文と物語

第二章 物語の中の手紙文

第一節 現代文の場合

第二節 古典の場合

第三節 現代文と古典の比較

第四節 西鶴の文学精神にみる手紙文の効用

おわりに

はじめに

私が学校から帰ってまずする事と言えば、郵便受けを開けるといふ事である。それは幼い頃からの私の癖であり、もう日課になってしまっている。その行動は何気ないものではあるが、心の奥底には、その中に入っているものへの期待がある。幼い頃には期待が表面化していたが、何度かそうしているうちに、いつの間にか慢性化してしまい、心の奥底に沈んでしまったのである。

しかし、郵便受けを開けて、郵便物が目に入った瞬間、心の奥底

にあつた期待が呼びおこされ、一気に爆発し、感動へと変化するのである。その感動はあまりにも大きくて言い表わせない。だが、いつも新鮮さを与えてくれる事は言うまでもない。私はその新鮮な感動が欲しくて、郵便受けを開ける事を日課すると同時に、手紙を書くという事も習慣づけてきた。

私にとって手紙は、心の中において、身近に感じられるものなのか、何者でもない。しかも、そんな身近な手紙ほど、数多くの文学と同じように、筆者の心情がよく読み取れる。特に肉筆の手紙は、活字になつた文学作品よりも、字の乱れなどが分かるので、なおさら、相手の心情がよく読み取れるのである。

そうした身近にある手紙も、文学と何らかの関わりを持っているという事を知つた。本論では、文学でも、特に物語の中から、手紙を扱つた作品を選び出し、現代文と古典とを比較した上で、物語にみる手紙文の効用を探らうと思う。そうすることによって、手紙への興味を一層深め、実際に手紙を書く時の役に立てたいと思う。

第一章 手紙文の特徴

第一節 手紙文と私達

手紙文を考えるにあたって、まず、次の詩を取り上げてみたい。

手紙

電話のすぐあとで手紙が着いた
あなたは電話ではふざけていて
手紙では生真面目だった

△サバンナに棲む鹿だったらよかったのに▽
唐突に手紙はそう結ばれていた

あくる日の金曜日（気温三十一度C）

地下街の噴水のそばでぼくらは会った

あなたは白いハンドバックを
くるくる廻し

ぼくはチャップリンの真似をし
それからふたりでピザを食べた

鹿のことは何ひとつ話さなかった

手紙しか言えないことがある

そして口をつぐむしかない問いかけも
もし生きつづけようと思ったら

星々と靴ずれのまじりあうこの世で

『手紙』谷川俊太郎

現代的に、しかも具体的に、手紙らしさをよく表現している、ずばり『手紙』というこの詩に、何か感じるものはないだろうか。長い間、友人をはじめ、多くの人達と文通してきた私は、すなおにうなずける何かを感じてならない。

この詩は、手紙らしさを強調するために、手紙と電話とを比較して書いている。しかし筆者は、電話は便利でいいとか、手紙は価値

があるとかという、N T Tや郵政省の片棒をかつぐようなことは問題にしていない。手紙を書くことによって、同じような体験をしたために、うなずかざるを得なかったのである。

この詩の中にあるように△電話のすぐあとで手紙が着いた▽とか、その逆の「手紙を出したすぐあとに電話をかけた」ということを私もよくする。その心理は様々であるが、この筆者の心理もよく分かる。そして、そのあとの△電話ではふざけ▽△手紙では生真面目▽という部分から、より一層、その心理が明らかにされるのである。筆者はおそらく、電話とは大きく違ひ、手紙での△あなた▽に気付き、驚きもあったであろうが、△手紙でしか言えないことがある▽ということを見出したのであろう。この発見は、私もしたことがある。朝、手紙を出して、午後から会うことになっても、その手紙の中心部分を読さなかったのである。ただ単に忘れたのではないし、時間がなかったのではない。話せなかったのではなく、話さなかったのである。しかし、手紙に書いたので、だぶってしまふから△手紙でしか言えないことがある▽のである。

現代は、電話という文明の利器により、手紙というものが、しだいに書かれることが少なくなってきた。確かに、書き手が書いて、読み手が読むまで、最低二日、だいたい三日はかかる手紙よりも、ボタン一つの電話は非常に簡単だ。しかし、その反面、筆不精の人が多くなっているのも事実なのである。手紙をもらうのが嬉しくて、それ以上に手紙を書いて出すのが楽しいという私は、どうしても、電話より、手紙の肩を持ってしまふ。だが、ここでは「手紙でしか言えないことがある」ということだけ訴えたい。「現代の私

達は、どんどん手紙を書くべきだ！」という手紙の必要性については、このあたりで論述をまとめておきたい。

第二節 手紙文と物語

前節では、手紙文の特徴として、「手紙文と私達」について考えた。そうして、現代では、電話の普及により、手紙の必要性が問題視されるようになったということを述べた。しかし、それだけでは、手紙文の分析を深められないので、手紙文と文学との関わりに触れてみたいと思う。そして、文学の中で手紙文の役割りや効用を深く追究していきたい、そこから、手紙文を分析して、手紙の必要性についても、考えを深められたらと思っている。

文学の中にも色々ある。詩、小説、戯曲など様々であるが、ここでは、その中でも、特に物語を取り上げて、手紙文と物語の関係について考え、物語にみる手紙文の効用を考えてみたいと思う。

「物語」という単語を辞書で引いてみると

① 物語ること。また、その内容。

② 語り伝えられてきた話。

③ (平安時代以降の) 散文の形式を取った文学作品。

(『新明解国語辞典』三省堂)

とあるように、幅広い意味がある。

これらのことから分かるように、物語には、色々な形式がある。また、手紙文を使った物語とは言っても、手紙文を途中に入れるか、あるいは、手紙文全てが物語かによっても、形式が大きく変わってくる。本論では、そういった形式にはこだわらず、現代文と古典に分けて、物語にみる手紙文の効用を探ってみることにした。

第二章 物語の中の手紙文

第一節 現代文の場合

それでは、実際に、手紙文が物語においてどのような役割りを果たしているか、また、その手紙における筆者の心情はどうであるかを考察してみたい。まず、この節では、現代文の作品の中から、一つを取り上げて考えることにした。

遺書の形式も含めると、手紙文を扱った作家と言えば、かなりたくさんある。なかでも特に代表的なものは夏目漱石、芥川龍之介、武者小路実篤などであろう。しかし、ここで私は、そういう三人とは違って、女流作家の一人である岡本かの子の手紙文を取り上げてみることにした。

こどもちよつとカチが書く。無事にかへつたよ。お前の居ない家へね。お前の居ない家へだよ。そしてごはんたべたり便所へはいつたりしてゐるよ。洋服着てるよ。上ぐつで日本のえんがほとんどあるいてるよ。お前が居たらこの無作法者！なんてなるだらう。誰も太郎さんはと聞くよ。ぐつと胸がつまるのでそれに反抗して反身になつちまうよ。涙が出るから氣どつてごまかして、どうもかへりませんのどと前おきするのよ。

そのあとの説明は推察しなさい。パパおとなしいよ。いい子だよわり合ひに、お前の事考へて時々ぼんやりしてるよ。そして二人でとしよりみたいに子の無いことの愚痴を云ふのよ。察しなさい。

遠き巴里の子よ想へかし

ふるさとの夜ふかき家に茶をのむ父母 かの子

〔岡本かの子全集第十五卷〕岡本かの子

これは、岡本かの子が息子の岡本太郎に宛てた手紙である。夫の岡本一平の手紙に添え書きしたもので、書き出しが「ここでちよつとカチが書く」となっているのはそのためである。「カチ」とあるのはかの子自身のこと、一平がかの子を呼ぶ幾つかの愛称のうちの一つであった。

私が岡本かの子のこの手紙を取り上げたには多くの理由があった。大きな理由としてあげられるのは、岡本かの子自身、息子の太郎と共に有名であるが、同時に、この手紙も有名であるということである。高等学校の国語の教科書でも扱われているくらいである。その教科書では、手紙の代表的なものとして扱われ、筆者の心情をつかむことを学ばせる教材としている。それは、教科書だけではない。手紙文から読み取れる筆者の心情についてまとめられた多くの文献にも、必ずといってよいほど扱われている。

これは物語として書かれたわけではない。だが、『岡本かの子全集』には、多くの作品と共に、貴重な書簡として収められている。だから、直接、物語として書かれていなくても、かの子自身の物語として、物語性があふれており、作品にも大きく関係している。それで、物語の中の手紙文を考えるには最適だと思ひ、この手紙を取り上げたのである。

この手紙文の筆者の心情を読み取るに当たり、色々な文献の考え方も参考してみたいと思う。文献により考え方は大きく違ひが、ここでは、『愛 一通の手紙』と『手紙の中の人間模様』の二冊を

比較して考えてみることにした。

まず、近藤富枝氏の『愛 一通の手紙』では、かの子の人生や考へ方から、この手紙の中の彼女の心情を深く考へている。彼女の生活ぶりは、くわしく書かれているが、あまり良くは書かれていない。例えば、「生来ぶきちよで家事は下手、家計のくりまわしだめ」(P三八)「常人の何層倍も愛の分量が大きく、絶えず対象に熱線を放射してないと気のすまないたちだ」(P四八)とか、あまり良いイメージではない。しかも、パリに子どもを捨てにいったのではないかとさえ、この文献の筆者(近藤富枝)は考へている。しかし、結局この筆者は、太郎をパリに住ませたのは、彼女自身の「太郎に絵の修業をさせたい」という切ない願いと、太郎自身の「母親の期待に心優しくも背けない」ということからだと考へていたと考へているのである。そして、そういうかの子だから、子のないわが家に帰った悲しみは、彼女を長くとらえて放さなかったという心情が、この手紙には、にじみでていると考へている。

一方、北嶋廣敏氏の『手紙の中の人間模様』では、この手紙から読み取られる心情を、手紙の文から引用し、深く考へている。例えば、「ごはんをたべたり便所へはいつたりしてゐるよ」とか「パパはおとなしいよ。いい子だよわり合ひに」から、親と子という関係をごえて、両者が対等にむきあっている姿が認めることができると言っている。つまり、人間同士の対等な関係をもちつづけたかの子に、母としての深い愛情を読み取っているのである。とにかく、この筆者は、息子に対して、こんな手紙を書ける母親、かの子をうらやましがっている。

こうして二冊の文献によっても、かの子の手紙から、彼ら親子の深い愛、特に母親の息子に対する強い愛情がうかがわれる。どちらの文献でも「愛」をテーマにしており、一方では「相愛」とあり、又もう一方でも「母情のしらべ」とある。こういう共通点から考えてみると、この手紙は「深く強い愛」以外の何者でもない、私は感じた。特に語尾が強い「よ」となっている所に、小さなことで気が付きにくい、自然な愛を感じる。また「推察しなさい」とか「察しなさい」とかにも、「お前なら分かるだろう」という二人だけの信頼感の純粹なものも感じる。そのようなことを感じさせるこの手紙は、六十数通に及ぶ太郎宛てのかの子の手紙のほんの一通にすぎないが、このすばらしい母と子の親愛あふれるこの手紙には、感動せざるを得ない。

第二節 古典の場合

前節では、手紙文を現代文の一例について考えてきた。そこで、この節では、古典の中で考えてみることにした。

古典でもやはり、手紙文を扱った作品は少なくない。ただですら、古典の作品というのは、世相の流れや時代の違いを知ることができて、大変興味深いものであると思う。そこに、手紙文を扱うことにより、筆者の心情は勿論、時代の差について何かをつかむということは、一層、古典の世界を楽しませてくれるように思う。

さて、ここで取り上げたいのは、井原西鶴の『万の文反古』である。これは、ぜひ取り上げてみたかった。というのも、手紙好きの私が手紙文の物語に対する影響に興味を持ったのは、この大学に入学して、井原西鶴の『万の文反古』を学んでからであった。その

時、筆者の心情を読み取る面白さを学んだことが、手紙文の面白さというものを実感させ、より一層、興味を持たせたと云っても、過言ではないと思う。

半紙本五巻五冊に十七章をおさめた短編小説集『万の文反古』は、西鶴の遺稿集五編の一つで、没後三年目の元禄九年（一六九六）正月に刊行された第四遺稿集である。外題は『西鶴文反古』であるが、作者がつけたタイトルは『万の文反古』である。この『万の文反古』とは「さまざまな手紙」という意味で、すべて手紙（書簡）のスタイルを採用しているところから、書簡体短編小説集とも呼ばれている。

それでは、『万の文反古』の中から、巻三の三「代筆は浮世の鬪」という手紙を取り上げてみたいと思う。まず、この手紙の概説を紹介してみよう。

女房の讒訴を信じて追い出し、今は出家している弟のところへ、兄が、人に頼んで書き送った手紙である。その手紙には、悪事の報いで死ぬにも死なれない境涯にいる兄が、この世の恥じを打ちあけるつもりで、自分がした悪事を述べている。その悪事というのは、ふとした欲心から道にそむいて、客の侍の財布を隠しとり、それが原因で、侍を自殺させたということである。その亡霊から、菩提心を起こして嗟嘆に隠遁した後、さまざまに苦しめられ、死ぬこともできないでいるのであった。

この手紙から筆者の心情を読み取るに当たり、ここでもまた、現代文の場合と同じく、まず、文献を参考にしてみたいと思う。今回は、くわしく述べられているので、『鑑賞日本古典文学西鶴』という文献によりながら考えてみることにした。この文献では手紙の中

に出てくる亡霊をテーマにしぼっている。西鶴の描く亡霊は、死なせないで最後まで苦しめようとし、懺悔によっても救われない罪悪感に、最後までその身を嘔ませようとするので、仏教的な因果思想にもとづく、たんなる説話的興味に発した作品ではないと理解している。

私はそういう手紙の中の亡霊から、筆者の心情を読み取ってみた。この場合の筆者は、作者である西鶴ではなく、手紙の差出人の兄である。この手紙で筆者は、大変後悔し、反省している。それは、自殺させてしまった侍と、追い出してしまった弟への二人である。そこまでさせたこの亡霊の力はすごいものである。筆者は、その亡霊を非常におそれており、なかば、自分の人生をあきらめている。おそれ、申し訳なきさそうにしているが、反面に、投げやりになっている筆者の心情を、この手紙はよくあらわしていると思う。そこで、物語を構成した西鶴に、私は、手紙文を扱わない物語にはない強烈な感動を覚えさせられた。

第三節 現代文と古典の比較

これまでの各節で、物語の中の手紙文を、現代文と古典とに分けて考えてみた。そこで、この節では、それを比較して考えてみようと思う。

簡単に、比較するとは言っても、現代文で取り上げた岡本かの子の作品と、古典で取り上げた井原西鶴の作品には、あまり共通性がない。手紙を、かの子は物語にするつもりで書いておらず、西鶴は物語にするつもりで書いているからであろう。だが、手紙というスタイルから、何かを得ようとしたのは、共通して言えることであ

る。それを原点にして、比較してみたいと思う。

“よ”とか“ね”とかの語尾で書かれた、親しみあふれる、かの子の手紙とは、対照的に、西鶴の手紙は、古典のせいもあるが、申し訳ないという気持ちがあふれて、少し固い感じがする。しかし、どちらも、手紙という形式のおかげで、筆者が読み手に自分の心情を強く訴えている。かの子の場合は、「息子に逢いたい」というこの手紙の心情を押さえきれず、後に『母子叙情』という小説を書いた。そのなかで、パリ留学の息子に似た青年のあとをつけて、あわい恋を経験するかの子らしい人物を登場させている。西鶴の場合でも、手紙の形式の良さを知っていたからであろう、『万の文反古』のように、手紙ばかりを素材にした物語を書いている。

このように、現代文と古典とを比較してみても、手紙を書いた意図が違っても、または、あえて手紙の形式をとったとしても、普通の文章より、筆者の内的心情を強くあらわすことにはかわりないということが分かった。

第四節 西鶴の文学精神にみる手紙文の効用

以上のように、物語と手紙文との関わりをみてみると、手紙文が物語に与える影響は、大きいものと言えよう。それは、先にみた、西鶴の『万の文反古』の中の序から、考えることができると思う。序では、世々の賢人たちの書きのこされた文(書物)は、皆人々の助けとなるものである。それに対し、同じ文といっても見苦しいのは今世間でやりとりされている状文(手紙)であるから、気をつけて捨てなくてはいけない。もし受取人が捨てないときは、その手紙は第三者の目に触れることになり、差出人はその身の恥じを

二度他人に知られることになるのだと西鶴はいっている。この序から考えてみると、西鶴は、非公開を原則とする手紙というものの自体、筆者の内面を率直に吐露するもので、その内面は、決して美しいものではなく、むしろ醜悪なものであると考えていたのだということが分かる。そして、西鶴は、その醜悪なものを、人間の真実であると考えているのである。そういう西鶴が、非公開を原則とする手紙のスタイルを、『万の文反古』で採用しているのは、このような文学精神と結びついた意識的な方法であったと考えられる。その精神が基本となって、現代に書かれる物語にも、手紙文が多く扱われているのだと思う。そこに、手紙文の効用を見出すことができる。

おわりに

私が今、身近で最も興味を持っている「手紙」というもの、これがかねてより、色々な面から追究して深めていきたかった。そうすることによって、正しい形式とよりよい心情の伝え方という表面と内面の両面から、書き方の知識を深め、実際に、活用できたらと思っています。

そして、この度、こうして様々な手紙の姿をみるに当たり、手紙文を分析するということは、非常に難しいことであるということに気がかされた。というのも、身近にあるたとえばどんな一通の手紙にもその奥底には必ず筆者の強い心情があるからであって、その心情を完全に読み取ることは、不可能であるからである。

本論では、物語との関わりで考えてみたのだが、その関連性は大きい。たとえばその手紙自身が物語として書かれていなかったとして

も、手紙というものの自体に大きなドラマがあり、書かれた時点で、それはもう筆者にとつての物語になるからである。

どんな手紙にもその中にはすばらしい何かがあると知った今、何気なくそばにある今日届いたばかりの手紙が輝かしく見える。そして、この手紙に返事を書けば、そこにはまた新たな物語が生まれるからである。

参考文献

- 『手紙の歴史』小松茂美・岩波書店・昭和五十一年
- 『愛 一通の手紙―炎の作家十五人の愛の書簡集』近藤富枝・主婦の友社・昭和五十九年
- 『手紙の中の人間模様―秘められたドラマ四十八人集』北嶋廣敏・グラフ社・昭和六十年
- 『手紙』谷川俊太郎・創美社・昭和五十九年
- 『別冊 太陽 日本のこころ 手紙』高橋洋二・平凡社・昭和五十九年
- 『鑑賞日本古典文学 西鶴』暉峻康隆・角川書店・昭和五十一年
- 『鑑賞日本の古典 西鶴集』宗政五十緒・長谷川強・小学館・昭和五十五年
- 『対訳西鶴全集 西鶴置土産・萬の文反古』麻生磯次・富士昭雄・明治書院・昭和五十二年
- 『現代語訳 西鶴全集 世間胸算用』暉峻康隆・小学館・昭和五十五年
- 『岡本かの子―華やぐいのち』古屋照・沖積舎・昭和五十七年
- 『岡本かの子の世界』熊坂敦子・冬樹社・昭和五十一年

『岡本かの子全集 第十五卷』岡本かの子・冬樹社・昭和五十二年

〔評〕

非常に面白く楽しかった。今までに接したことのない卒論で、テーマを聞かされたとき、どういうふうにまとめてゆくのかと期待と不安があったのは本当である。

相当の表記力を持ち、弾力性のある思考力もうかがわれ、頼母しくさえ思った。副題の「物語に見る」は「作品に見る」と改めたらどうかと思う。

文中で参考資料を採用するときには、作者名を提示し、かつ、引用文献の記載ページを記入してほしかった。

短大生活を卒えるに当たり何よりの良き記念となったことを喜ぶ。

(野崎アサエ)